様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１１９５

研究課題名（和文）ヴェーダとタントラの相互影響：南インド現地調査と文献調査に基づく総合的研究

研究課題名（英文）Mutual Influences between the Vedic and Tantric Traditions in Modern Times of South India

研究代表者
手嶋　英貴（Teshima, Hideki）

龍谷大学・法学部・教授

研究者番号：３０３８８１７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：　主要な研究成果は以下の３つにまとめられる。
①南インドでヴェーダ儀礼とタントラ儀礼という両伝統にまたがって行われている「ナーンディームカ」「プニヤアーハ」という二種一組の家庭儀礼を調査し、当該儀礼の歴史的形成、およびその文化史的意義を相当程度明らかにした。②南インドに広く領土を有したトラヴァンコール王室の儀礼のうち「王灌頂」に頂点をあて、学界初となる儀軌写本の校訂テキスト・和訳を作成し、インド各地にある王灌頂儀軌と比較するための基礎を築いた。③ケーララ州においてヴェーダとタントラという両儀礼伝統を維持する家系、組織、共同体を調査し、現実の人々と諸儀礼の関わりの実態を相当程度明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究では、タントラ儀礼の一部が、ヴェーダ儀礼をその起源とするものの、基本的に、理念と形式双方においてヴェーダ儀礼と異なる発展を遂げたと考えられてきた。それに対し本研究では、ヴェーダ（ヴァイディカ）とタントラ（ターントリカ）という両伝統が、現実のインド社会では、理念と形式、それを維持する人的組織において区別されながら、様々な局面で相互に影響を及ぼしてきた事実を明らかにした。そうした新知見の解明に加え、専門家同士の協力が十分といえなかったヴェーダとタントラという両研究領域の結合可能性を明示し、今後のさらなる領域横断的研究の礎を置いたことも、本研究が有する学術的、社会的意義と言えよう。

研究成果の概要（英文）：The main findings of the research can be summarised in three main areas. (1) The actual situation of the pair of domestic rituals called 'Naandhimukha' and 'Punyaha' practiced in both Vedic and Tantrika traditions in South India has been studied, and the historical formation of these rituals and their cultural-historical significance have been clarified to a considerable extent. (2) Focusing on the 'abhiseka' among the kingship rituals of the Travancore royal family, which had an extensive territory in South India, we prepared the first critical edition and Japanese translation of manuscripts of the rituals, and laid the foundation for comparison with other abhiseka rituals in various parts of India. (3) Research into the families, organisations and communities that maintain both Vedic and Tantric ritual traditions in Kerala has revealed a considerable amount about the realities of the relationship between people and the various rituals.

研究分野：インド宗教文化史

キーワード：Kerala　kingship　ritual　South India　abhiseka　nandimukha　punyaha　Travancore

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ヴェーダとタントラは、インド土着の宗教儀礼における伝統的な二つの区分として知られる。歴史的には、紀元前 1000 年紀を中心に儀礼体系を整えたヴェーダから、中世以降に、それを基礎にしながらも大きく革新したタントラへと、儀礼文化の主流は移っていった（例えば Sh. Einoo, “The Formation of Hindu Ritual”. In: *From Material to Deity —Indian Rituals of Consecration*, pp. 7-49, New Delhi, 2005 年を参照）。ただし、中世以降タントラが優勢となる中でも、ヴェーダ儀礼は一部で連綿として受け継がれてきた。特にブラーマンの社会では、二つの宗教伝統のどちらかを主として学び、儀礼を司るといった継承のあり方がよく見られる。そして、どちらの伝統に属するかによって、儀礼とその伝承者たちを「ヴァイディカ」あるいは「ターントリカ」と呼び分けてもいる。

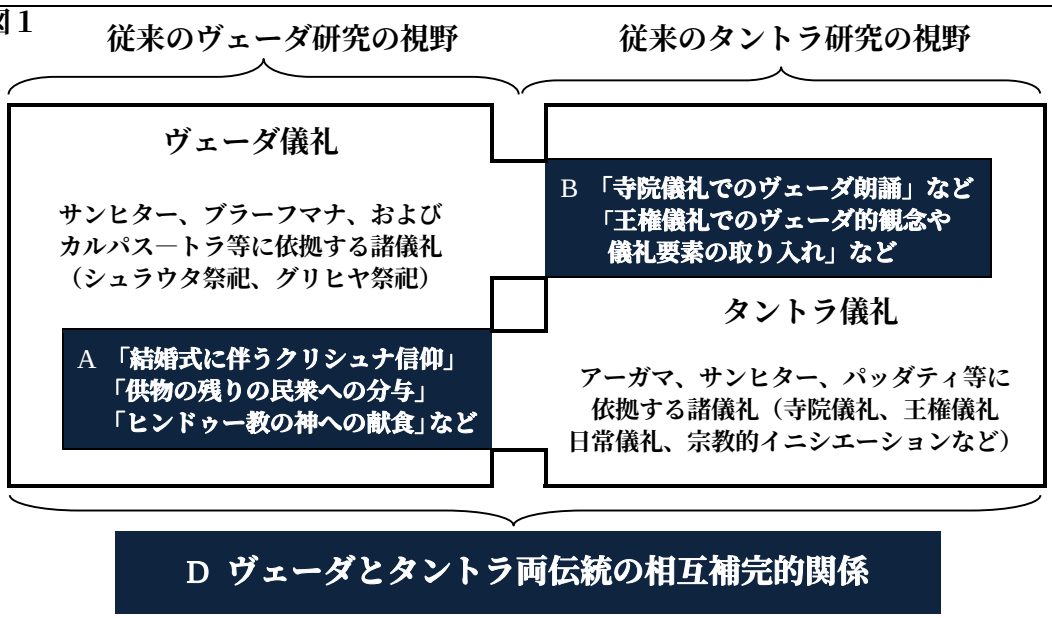
このうち、今に伝わるヴェーダ儀礼には、1970 年代から複数のヴェーダ文献研究者が関心を寄せ、古代の儀軌文献と照合する実地調査を行ってきた。例えば、南インド・ケーララ州での大規模なシュラウタ祭祀・アグニチャヤナ（*agnicayana-* 火壇建造祭）を研究対象とした F. Staal (ed.), *Agni: Vedic Rituals of the Fire Altar*（Berkley, 1983 年）はその代表的成果である。

タントラについては、1960 年代からようやくその儀軌文献が本格的に研究・公刊されはじめ、その営みは今日も続いている。H. Brunner-Lachaux、A. Padoux らによる重要文献の校訂を先駆けとし、A. Sanderson、高島淳、D. Goodall ら多くの学者によって新出写本の調査、テキストの校訂・公刊が行われている。これらのタントラ研究者は、現代に行われる儀礼の観察もしばしば行うが、その主眼は当面の課題である文献研究に資する情報の収集にある。その点で、いち早く重要文献の大半が公刊されたヴェーダ領域の研究者とは、現代儀礼への関心のあり方が自ずと異なっている。

一方、こうした従来の研究において、ほとんど看過されてきた重要なポイントがある。それは、「ヴェーダとタントラ両儀礼が単に並行的に存在しているのではなく、様々な局面で交わり、互いに影響を及ぼしている」ということである。例えば、近現代のヴェーダ・グリヒヤ祭祀では、結婚式に伴う一儀礼にクリシュナ信仰が見られる。また、祭火に献じられた供物の残りが、効験あるものとして民衆に分与されるなど、ヴェーダ規定にないタントラ的要素がある（図１「A」）。逆にタントラ儀礼の側でも、随所にヴェーダ的要素が存在する。例えば、寺院儀礼の一部として行われるヴェーダの朗誦、近代まで続いた王権儀礼におけるヴェーダ儀礼との接合（同「B」）などがその好例である。

しかし、従来のヴェーダ研究では、サンヒターやブラーフマナ、カルパスートラといった諸聖典の規定が実際の儀礼でどう行われるかに主たる関心が寄せられてきた。そのため、非ヴェーダ的要素があっても、関心が十分に向けられなかった。同様の状況はタントラ研究でも生じていた。実際のタントラ儀礼でアーガマ、サンヒター等の聖典にないヴェーダ的要素が見られても、その起源を掘り起こすことはなされなかった。こうして、二つの伝統が交わる側面（図１のうち「A」・「B」の白抜き部分）は、従来研究の視野から抜け落ちてきた。本研究はまさしくそこに焦点を当て、両儀礼のあり方を総合的に観察することにより、ヴェーダとタントラ両伝統の間にある相互補完的な関係（図１「D」）を明らかにすることを企図した。

図１



２．研究の目的

現在の一般的な説明では、まず古代にバラモン教（ヴェーダの儀礼や思想）があり、それが民間信仰等と混交し発展することでヒンドゥー教（タントラの儀礼や信仰、思想）が成立したとされる。しかし実際にはタントラの出現後もヴェーダは存続し、高い権威を維持した。前者は必要に応じて後者の権威を借用し、後者は前者がもつ民衆への訴求力を取り込んできた。そうして相互に価値を補うことで両者は社会的・文化的活力を維持してきた。ヒンドゥー教とは、このような相互補完的関係にある二つの宗教伝統の総体として理解すべきものではないか。こうした問題意識から、本研究では儀礼にとどまらず、両伝統間にある相互補完の事例を広く収集・分析することを目指した。それにより、ヒンドゥー教を主流とするインドの社会と文化を深く、その本質から理解する視座を提示したいと考えた。

上記の問題意識に基づき、本研究では近現代インドにおけるヴェーダ、タントラ両伝統の相互影響を解明することを目指した。ただし、一定の研究期間で具体的かつ着実な成果を生み出すためには、地域および研究トピックを有意義な仕方で限定することが望ましい。そこで、地域については、ヴェーダ祭祀がよく保たれている南インド、とくにケーララ州を主な調査対象とした。本研究に参画する研究者の多くがこの両州で豊富な調査経験をもっており、現地の人的コネクションなど研究推進の諸条件がすでに確保されていることにも利点があった。その上で、南インド調査において蓄積された知見を汎インド的視野で位置づけることが重要となる。

３．研究の方法

こうした研究目的に沿って、本研究では四つの調査対象をピックアップ、それぞれの調査のために「特定研究」という三つの活動を立ち上げた。これら三つは、ヴェーダとタントラの相互影響を解明するために軸となる調査を、それぞれの主題としている。そして個々の成果を集約することにより、前項に挙げた研究課題に答えうる総合的な知見を構築することを目指した。

特定研究 A	ヴェーダ・グリヒヤ祭祀におけるタントラ的要素 推進担当者：梶原三恵子・手嶋英貴
特定研究 B	王権儀礼におけるヴェーダとタントラの関係 推進担当者：高島淳・井田克征・手嶋英貴
特定研究 C	ヴェーダ・タントラ相互補完の汎インド的事例 推進担当者：井田克征・高島淳・手嶋英貴

特定研究 A「ヴェーダ・グリヒヤ祭祀におけるタントラ的要素」では、主にケーララ州で行われるグリヒヤ祭から非ヴェーダ的要素を抽出し、分析した。グリヒヤ儀礼には多くの人生儀礼や祖霊崇拝儀礼などが含まれるが、それらは基本的に、古代に成立したヴェーダ祭祀文献の規定に沿って挙行される。ところが、近現代において行われるグリヒヤ儀礼の中には、しばしばヴェーダ規定に存在しない儀礼要素が発見される。この特定研究では、グリヒヤ祭祀の専門家である梶原三恵子がグリヒヤ・スートラ文献を主とするサンスクリット文献を調査した。他方で、ケーララ州で用いられるマラヤーラム語の儀軌文献「グリヒヤ・チャダンガ」の調査を、手嶋英貴が担当した。二人の調査結果を総合することで、グリヒヤ祭祀における非ヴェーダ的要素の起源、および今日の形態に至る発展過程を分析した。

特定研究 B「王権儀礼におけるヴェーダとタントラの関係」では、インド独立まで南インドに存続したトラヴァンコール藩王国の王権儀礼を調査した。同国の儀礼は多くが 18 世紀頃に整備された。そのうち特に、王の即位式にあたる「王灌頂」に焦点を当て、そこでヴェーダ的要素とタントラ的要素がどのように接合されているかを解明することとした。同時に、トラヴァンコール王室の筆頭司祭（ラージャグル）を務めたブラーマン家系が保持するパームリーフ写本を用いつつ、学界初となるトラヴァンコール王室の王灌頂儀軌の校訂テクスト作成にあたった。この特定研究では、タントラ王権儀礼を長年調査してきた高島淳と、ヴェーダ王権儀礼を専門とする手嶋英貴、およびヒンドゥー儀礼の専門家である井田克征が共同で研究を推進した。三者の知見を照らし合わせ、王灌頂儀軌のテクストを精緻に読み解き、そこに見られるヴェーダとタントラ両要素の接合形式を分析した。

特定研究 C「ヴェーダ・タントラ相互補完の汎インド的事例」では、ヴェーダとタントラの相補的関係を示す多様な事例を分析した。手嶋英貴はケーララ州でヴェーダとタントラ双方の伝承者コミュニティの実態を調査した。高島淳と井田克征は、中世後期の西北インドに広大な領土を持ったマラーター王国の建国者であるシヴァージーの王灌頂儀軌を複数入手し、その内容を調査した。こうして南インドと西北インド、両地域に伝わる王灌頂儀軌を参照し、ヴェーダとタ

ントラ両儀礼要素の接合形式として共通に見られるものを確認することに努めた。この確認作業は、より起源の古い接合形式を特定するための手がかりをもたらすと考えた。

４．研究成果

まず特定研究 A「ヴェーダ・グリヒヤ祭祀におけるタントラ的要素」の範囲では、ケーララ州におけるいくつかのグリヒヤ祭祀で、開始時に「ナーンディームカ（喜んだ顔をした祖霊の供養）」と「プニヤアーハ（吉日の宣言）」と呼ばれる二つ一組の、複雑な構成を持つ儀礼セットが組み込まれていることに着目した。この両儀礼をグリヒヤ祭祀の冒頭で一セットとして行うことは、正規のヴェーダ規定に見られない。ただし、ナーンディームカとプニヤアーハは、それぞれ個別の小儀礼として、グリヒヤ儀軌文献に言及される。その二つがなぜ一体化し、かつ複雑な次第をもつ儀礼セットとして、特定のグリヒヤ祭祀の冒頭に組み込まれたかは、これまで考究されてこなかった。

梶原三恵子は、グリヒヤ・スートラおよびグリヒヤ補遺文献の広範な調査から、プニヤアーハの発生および発展のプロセスを明らかにした。それによれば、プニヤアーハは当初、めでたい祭祀・儀礼の冒頭で（あるいは最後に）、挙行の当日が吉祥であることを宣するものであった。ただし後代になるとそれが、「浄め」の効果と結び付けられる傾向が見られ始める。一方で、ナーンディームカは当初、めでたい儀礼に際して行われる祖霊への敬礼であった。このようにグリヒヤ文献の範囲では、ナーンディームカとプニヤアーハは、それぞれめでたい祭祀・儀礼に際して行われるという共通点を持つ。しかし、いずれも特定の言葉を発するだけの簡単な所作であり、複雑的な次第を持つ儀礼にはなっていない。

手嶋英貴は、ケーララ州における調査で、ヴェーダ、タントラ両儀礼にまたがる形で、ナーンディームカとプニヤアーハが一連の儀礼セットとして、様々な祭祀・儀礼の冒頭に組み込まれていることに着目した。この儀礼セットはヴェーダ、タントラ両方のマラヤ―ラム語の儀軌文献「チャダンガ」に規定されており、正規の式次第の一部をなしている。チャダンガを調査した結果、ヴェーダとタントラ双方の伝承において、この儀礼セットの内容はおおむね共通していることが分かった。そこでのナーンディームカは、祖霊への敬礼が、儀礼の場に招かれた賓客への礼遇と結合している。プニヤアーハのほうは、もっぱら「浄め」の儀礼として位置付けられており、「吉日の宣言」という原義はほぼ失われていた。いっぽうケーララのプニヤアーハには、『リグ・ヴェーダ』から採られた多数の詩節の朗誦が組み込まれるという、大きな特徴がある。各詩節の内容を確認したところ、いずれも「浄める」を意味する動詞やその派生語（名詞、形容詞等）を含むものであり、浄めの効果を高める意図で朗誦されることが理解された。これら二つが一連の儀礼セットとして行われる理由を、現地の儀礼執行者（祭官）に聞き取り調査をしたところ、祖霊を遇するナーンディームカ儀礼で一種の穢れが発生するため、直後にそれを浄めるためのプニヤアーハ儀礼を行う、ということであった。

その上で注目されるのが、ケーララのプニヤアーハ儀礼の最後に、ガナパティ（ガネーシャ）への献食（ニヴェーディヤ）が組み込まれていることである。シヴァ神の息子とされるガナパティへの献食は、明らかにターントリカ儀礼の要素であり、ここに、ヴェーダとタントラ両儀礼の接合が見られる。この接合が生じた理由は、ガナパティが除災神として信仰されていることから理解できる。つまり、「ナーンディームカ」で生じた穢れの災いを、『リグ・ヴェーダ』詩節の朗誦だけでなく、ガナパティへの献食によっても除去するという意図が推察される。このように、特定の目的を効果的に達成しようとする時、ヴェーダ儀礼だけでなく、民衆の信仰を広く得ているタントラ（この場合ヴェーダに相対するターントリカの意味）の儀礼も、一緒に行われうることが分かった。この調査結果は、両儀礼伝統の相互補完が生じる典型的なケースを示すものと言えよう。上記の成果については、すでに京都大学人文科学研究所共同研究において、口頭で報告された。今後は学術雑誌で、論文として公表される予定である。

次に、特定研究 B「王権儀礼におけるヴェーダとタントラの関係」の範囲では、旧トラヴァンコール王室の王灌頂儀礼において、ヴェーダとタントラの要素がどう結びついているかを明らかにした。まず調査のための基礎資料として、パームリーフ写本（マラヤーラム文字）の形で伝わる「ラージュニャーム・アビシェーカ・カルマン（諸王灌頂儀礼）」という詩文体の儀軌を解読した。また近代になってこの儀軌を書写したデーヴァナーガリー文字の紙写本が、ポンディシェリのフランス学院（Institut Français）に所蔵されていることが分かり、そのコピーを入手した。その上で、両本の校合に基づく、学界初となる同儀軌の校訂テクストを作成した。

上記の儀軌を精査した高島淳は、そこに描かれる灌頂が、ラージャ・グル（王の師）から弟子としての王になされるイニシエーションであることに着目した。この種の灌頂は、祭官や臣民による四方からの灌頂であるヴェーダ由来の灌頂とは異質のものであり、トラヴァンコールの王がラージャ・グルと、タントラ的な師弟関係を結んでいたことを示すものである。一方この儀軌では、前項で紹介した「ナーンディームカ」と「プニヤアーハ」の儀礼セットが行われることも言及される。この儀礼セットはヴェーダ由来のものであり、先述したように数多くの『リグ・ヴェーダ』詩節が朗誦される。つまり、トラヴァンコールの王灌頂はタントラ儀礼として挙行されるものであるが、一種のめでたい儀礼であるため、その性格に応じて「ナーンディームカ」と「プニヤアーハ」のセットと結合していると考えられる。

以上の調査結果からは、ヴェーダとタントラの両儀礼が、理念上は別のものとして扱われながら、実際には柔軟に結合し、祭祀・儀礼の効果を高めるために相互補完を果たしていることが分かる。今後はこれらの知見をまとめた成果として、「ラージュニャーム・アビシェーカ・カルマン」の校訂テクストと英訳、および詳しい内容解説を含む論文を学術雑誌に公表する予定である。

最後に、特定研究 C「ヴェーダ・タントラ相互補完の汎インド的事例」の範囲では、中世後期に西北インドを支配したマラーター王国の創始者・シヴァージーの王灌頂を調査してきた。ここで特に注目されるのは、シヴァージーが二種類の王灌頂を、それぞれ別に行っていることである。一つはプラーナ（パウラーニカ）の儀礼であり、もう一つはタントラのものであった。伝承によれば、最初にプラーナの王灌頂を行った後、身辺に凶事が続いたため、重ねてタントラの王灌頂も行ったという。この二つの王灌頂にはそれぞれ儀軌が伝わっており、それを精査・比較することで、中世期の西北インドにおけるプラーナ、タントラ両系統の王灌頂の差別化ポイントを明確にすることが期待される。

プラーナの王灌頂については、代表的な先行研究である Hans Losch, *Rājadharma : Einsetzung und Aufgabenkreis des Königs im Lichte des Purāṇa's*（1959）を参照しながら、プラーナ文献自体に含まれる王灌頂儀軌と、シヴァージーの儀礼に用いられた儀軌との異同を確認していく必要がある。この作業は手嶋英貴が担当している。またもう一つのタントラ王灌頂については、タントラ王権儀礼の専門家である高島淳と、マラーター王国時代の宗教事情に詳しい井田克征が調査を担当している。これらシヴァージーによる二種の王灌頂の実態を明らかにした後、他方で調査を進めているトラヴァンコールの儀礼と比較し、汎インド的な視野で王灌頂の発展過程に関する新たな知見を得たい。この研究は継続中であり、今後、具体的な成果の導出につなげていく所存である。

なお、これら在地君主の王権儀礼を支えてきた人的組織（司祭、寺院、儀礼に関わる民衆など）のあり方も、ヴェーダとタントラの相互影響が生じる環境要因として重要である。例えば、ヴェーダ儀礼を執行する祭官がタントラ儀礼に精通していたり、逆にタントラ儀礼の司祭がヴェーダの儀礼について知識を持っていたりすることが、両儀礼伝統の接合を可能にしている。また儀礼に参画する民衆や、儀礼を通じて民衆からの尊敬をより多く獲得しようと望む為政者たちの願望も、両儀礼の接合を促してきた要因の一つに挙げられよう。こうした人的組織の研究は手嶋英貴が複数回の現地調査を通じて行った。その成果は、大まかに以下のような知見としてまとめることが出来る。

現実のブラーミン社会では、ヴェーダの知識伝承と儀礼の実行を担う家（ヴァイディカ家系）と、タントラのそれ（ターントリカ家系）とは常に分岐しているわけではない。同じ家系が両方を兼ねるケース（例えば本家はヴァイディカ、分家はターントリカといったケース）がある。また、ヴェーダ家系の人々も、日々ヒンドゥー寺院に参詣し、自宅内にヒンドゥー教の神々を祀る神室を作り、日常的に礼拝を行っている。一方のタントラ家系の人々も、冠婚葬祭等の人生儀礼は全てヴェーダ式で行うため、ヴェーダ儀礼に接触する機会は豊富にある。つまり、ヴェーダとタントラという両儀礼は、理論的には別であるが、それに関わる人々は重複している。こうして両儀礼の伝統が、現実の人々の生活の中で同居していることから、両系統のうちに性格の近接した儀礼があれば連合を生じ、儀礼効果を高めようとする願望があれば両方を接合する例が生じるのである。

上述のとおり、本研究では、ヴェーダ（ヴァイディカ）とタントラ（ターントリカ）という両伝統が、現実のインド社会では、理念と形式、それを維持する人的組織において表面上は区別されながら、様々な局面で相互に交渉し、影響を与え合ってきたことを明らかにした。そうした新知見の提示に加え、これまで専門家同士の協力が十分といえなかったヴェーダとタントラという両研究領域の結合可能性を示し、さらなる領域横断的研究の礎を置いたことは、本研究が有する学術的、社会的意義と言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 高島淳	４．巻 96
２．論文標題 ケーララに伝わる王の灌頂儀礼	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 177-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手嶋英貴	４．巻 115
２．論文標題 ユディシュティラと仏教的「転輪王」の観念 ―『マハーバーラタ』第14巻と仏典の転輪王説話との比較―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『人文學報』（京都大学人文科学研究所紀要）	６．最初と最後の頁 27-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Katsuyuki Ida	４．巻 4
２．論文標題 The Relationship between Dalits and Gundam Raul in the Mahanubhav Hagiographies	５．発行年 2022年
３．雑誌名 MINDAS Series of Working Papers	６．最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Katsuyuki Ida	４．巻 7
２．論文標題 Emotions Relating to Salvation in the Bhakti Literature of Maharashtra	５．発行年 2022年
３．雑誌名 FINDAS International Conference Series	６．最初と最後の頁 26-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梶原三恵子	4．巻 68-1
2．論文標題 アーラニヤカ文献の生成過程の一側面 ― santi マントラを手掛かりに	5．発行年 2019年
3．雑誌名 印度学仏教学研究	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 梶原三恵子	4．巻 181
2．論文標題 パーリ語初期仏教経典における brahmacarin- の語について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東洋文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 261-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 Mieko Kajihara	4．巻 30
2．論文標題 The Observances or vedavratas for Learning of the Veda	5．発行年 2022年
3．雑誌名 インド哲学仏教学研究	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002005813	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 梶原三恵子	4．巻 185
2．論文標題 21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー（十六儀礼）とその特徴	5．発行年 2023年
3．雑誌名 東洋文化研究所紀要	6．最初と最後の頁 387-417
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002009759	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 ケーララに伝わる王の灌頂儀礼
３．学会等名 日本宗教学会第 81 回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 ヴェーダの伝統とヒンドゥー教: 両者の関係を問いなおす
３．学会等名 第１回RINDASセミナー「中世ヒンドゥー教とはなにか」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hideki Teshima
２．発表標題 Rebirth Doctrine of the Manava-Dharma-Sastra with Special Reference to the Correspondence with the Teaching in MaitU 3.3
３．学会等名 The 7th International Vedic Workshop, Dubrovnik（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 無遮会のおこり: 諸聖典の比較から見えてくること
３．学会等名 「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第7回シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 絶対者とヒンドゥー教
３．学会等名 第１回RINDASセミナー「中世ヒンドゥー教とはなにか」
４．発表年 2019年

１．発表者名 梶原三恵子
２．発表標題 アーラニヤカ文献の章構造とヴェーダ学習
３．学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 梶原三恵子
２．発表標題 アーラニヤカ文献の santi マントラ―「聖典」の形成過程を考える
３．学会等名 「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第7回シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 梶原三恵子
２．発表標題 グリヒヤスートラとグリヒヤ補遺文献における Punyaha 儀礼概観
３．学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「インドにおける『循環的存在論』の形成」第12回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 梶原三恵子
２．発表標題 頭や眼を覆うことと秘義学習
３．学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「インドにおける『循環的存在論』の形成」第17回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 浄罪儀礼としてのアシュヴァメーダ ―ヴェーダ、叙事詩・プラーナ、銅板文書の比較
３．学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 ケーララ州のジャイミニーヤ派（サーマヴェーダ）に伝えられるPunyaha儀礼の概要
３．学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「インドにおける『循環的存在論』の形成」第12回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hideki Teshima
２．発表標題 People and Things Surrounding the Ritual Site of the Asvamedha Described in the Epic Literature
３．学会等名 The 10th Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Puranas（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 古代インドにおける寸法システム：宗教と科学の接点
３．学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 『マハーバーラタ』に描かれた王権儀礼の特徴』
３．学会等名 「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第10回シンポジウム
４．発表年 2024年

１．発表者名 手嶋英貴
２．発表標題 無遮會と般闍于瑟ー仏典にかいま見える『大施与』儀礼の生成
３．学会等名 第68回国際東方学者会議，シンポジウムⅢ「仏典を歴史化する―インド仏教研究の最前線」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計6件

１．著者名 Shrikant S. Bahulkar, Hideki Teshima et.al.	４．発行年 2019年
２．出版社 New Bharatiya Book Corporation	５．総ページ数 725
３．書名 Living Traditions of Vedas: Proceeding of the International Vedic Workshop (IVW) 2014	

１．著者名 高島淳・手嶋英貴	４．発行年 2020年
２．出版社 龍谷大学現代インド研究センター	５．総ページ数 37
３．書名 『ヒンドゥー教とはなにか』RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 30	

１．著者名 藤井正人・手嶋英貴（編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 法蔵館	５．総ページ数 476
３．書名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム１： 古代・中世インドの社会と思想	

１．著者名 藤井正人・手嶋英貴（編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 法蔵館	５．総ページ数 434
３．書名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム２： 古代・中世インドの宗教と実践	

１．著者名 Hideki Teshima et al.	４．発行年 2023年
２．出版社 Croatian Academy of Sciences and Arts	５．総ページ数 477
３．書名 Medhota sravah I. Felicitation Volume in Honour of Mislav Jezic on the Occasion of His Seventieth Birthday	

１．著者名 Hideki Teshima et al.	４．発行年 2023年
２．出版社 Croatian Academy of Sciences and Arts	５．総ページ数 403
３．書名 Vedic Roots, Epic Trunks, Puranic Foliage. Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Puranas, DICSEP publications, vol. 7	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	梶原　三恵子 (Kajihara Mieko) (00456774)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	高島　淳 (Takashima Jun) (40202147)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	井田　克征 (Ida Katsuyuki) (60595437)	中央大学・総合政策学部・准教授 (32641)	
研究分担者	藤井　正人 (Fujii Masato) (50183926)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関